

# PipeLine

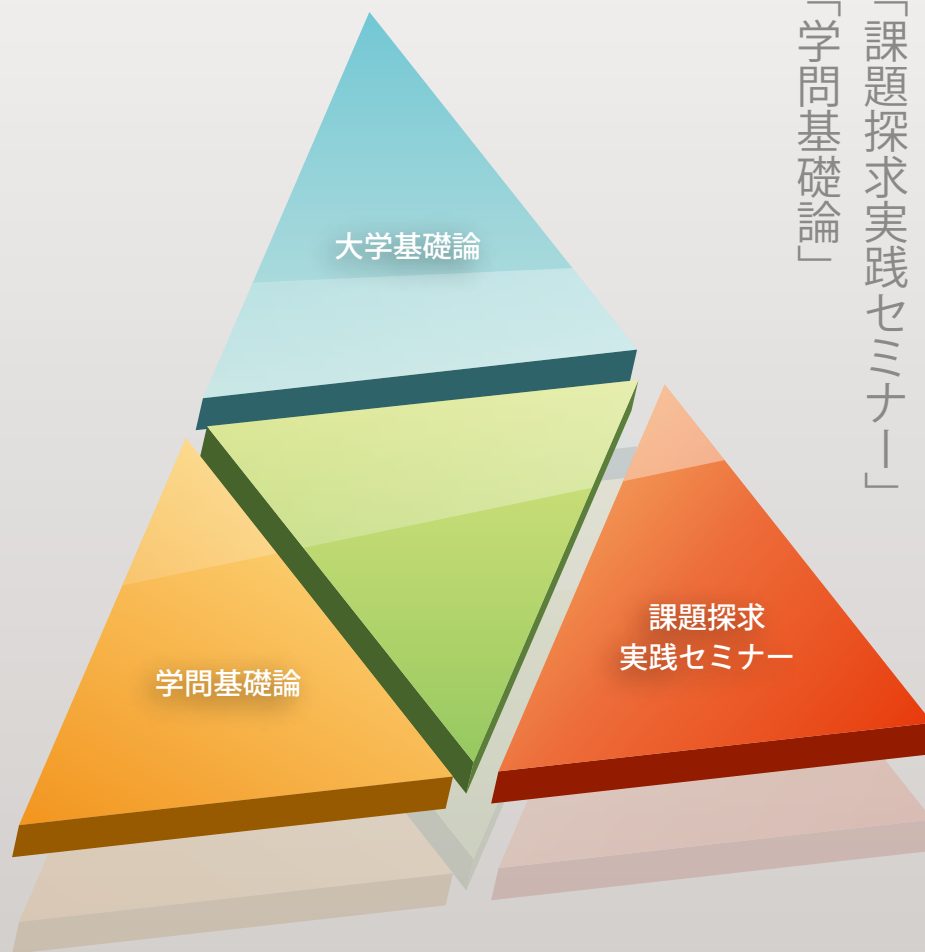
特集

分科会

「大学基礎論」

「課題探求実践セミナー」

「学問基礎論」



## No.58 Contents

特集	分科会「大学基礎論」 「課題探求実践セミナー」 「学問基礎論」	P1 P3 P5
教養のページ	「アントレプレナーシップの育成」	P7
FD部会より	大学4年間に会う「変化」 ～コロナ禍と授業・授業改善・そして「学び」～	P9
共通教育実施委員会からのお知らせ	オンライン授業の課題と今後について	P11

# 大学基礎論

大学基礎論分科会長

若松 泰介（農林海洋科学部）

「大学基礎論」は 1 年生第 1 学期に開講される初年次科目です。本科目の授業形式や教員の担当方式などは各学部で決定し実施していますが、共通目的は以下の通りです。

- ① 大学で学ぶことの意義と目的について考える。
- ② 「教わる」から「学びとる」へ学びの姿勢を転換することの重要性を認識する。
- ③ 卒業時又は卒業後の自分の将来像について意識する。
- ④ 卒業時にどのような能力をつけておくべきか考える。
- ⑤ 社会における大学や学問の位置づけについて考える。
- ⑥ 高知における高知大学の存在意義について考える。
- ⑦ 相手の話をよく聞き、自分の考えを分かり易く伝えるという双方向コミュニケーション能力の重要性を認識する。
- ⑧ 議論の基本的な進行方法と合意形成の手法を修得することの重要性を認識する。



令和3年度の授業アンケートでは、①と②が達成できたかについて、全学部で「はい」又は「どちらかというとはい」と9割近くの学生が回答しています。その一方で、③、⑥、⑧については、一部の学部で「はい」又は「どちらかというとはい」に該当しない学生が半数以上いました。⑧の結果は、本年度グループワークを実施出来なかったことに起因します。ここでは、私が所属する農林海洋科学部の令和3年度の実施内容を紹介します。

- 第1回目：オリエンテーション（授業計画など）とキャリア形成講義（担当：学生総合支援センター）
- 第2回目：学部長と学務委員長による講話（地方大学のあり方）
- 第3回目：チームビルディング・テーマの選定
- 第4、5回目：グループワーク・プレゼン準備
- 第6回目：プレゼンテーション・振り返り
- 第7回目：アカデミックライティング（担当：学生総合支援センター；レポートと作文の違い）
- 第8回目：アカデミックライティング（担当：学生総合支援センター；読みやすくするためのポイント）
- 第9回目：基本講義Ⅰ（農林資源環境科学と社会）
- 第10回目：基本講義Ⅱ（宇宙と地球と生命の歴史）
- 第11回目：基本講義Ⅲ（農学は人類を救う）
- 第12回目：講義Ⅰ～Ⅲを題材としたグループワーク・プレゼン準備
- 第13回目：グループワーク・プレゼン準備
- 第14回目：最終プレゼンの作成
- 第15回目：最終プレゼンテーション・振り返り

特にグループワークの手法を用いて、自分の意見の表明、他人の意見の論理的理解、複数の意見の取りまとめによるグループとしての意見形成に取り組ませ、わかりやすく説得力のあるプレゼンテーションに至る一連のプロセスを複数回体験する内容になっています。新型コロナウイルス対策における活動制限がレベル2に上がった後のグループワークも、Microsoft teams を利用しオンラインで実施しました。学生間のファイルの共有なども上手く行えたようで（パイプライン No.57、コロナ禍でのグループワーク実施について考える（若松執筆）参照）、⑦と⑧ができたかについて「はい」又は「どちらかというとはい」と答えた学生が他学部と比べ多かったです。また、⑥も9割以上の学生が「はい」又は「どちらかというとはい」と答え、高知大学と地域との関わりについて深く学べたようです。

以上、農林海洋科学部の大学基礎論を紹介しましたが、理工学部や地域協働学部では企業で働かされている複数の学外講師による講義を行い、1年生から自身のキャリアプランを強く意識できる内容で、③と④で「はい」又は「どちらかというとはい」と答えた学生が多いなど、学部ごとに特色があります。これから始まる大学生活のスタートダッシュを成功させるためにも、有意義に本講義を受講してほしいと思います。



# 課題探求実践セミナー

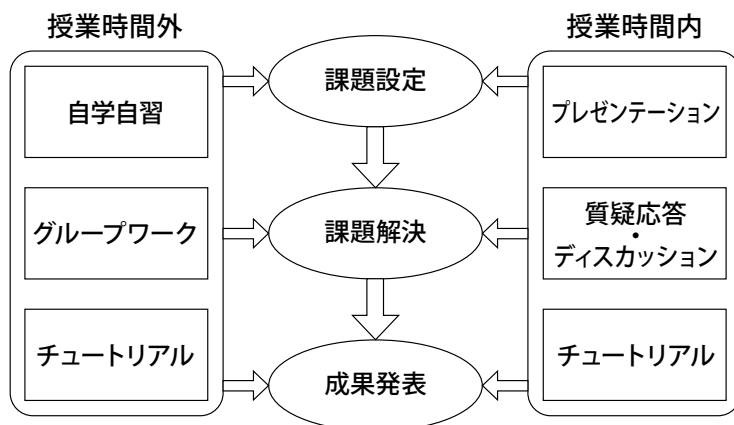
課題探求実践セミナー分科会長

俣野 秀典 (地域協働学部/大学教育創造センター)

「課題探求実践セミナー」は能動的・主体的・探求的な学びへの転換を支援する授業です。初年次科目のなかでも学生の自律的な学習に重点がおかれ、少人数グループワークを学習方法の基本に据えて、学生自身が自己分析や振り返りを行うことで学びや成長への見通しを持っていくところに特徴があります。2021年度は、共通教育開設の「自由探求学習Ⅰ・Ⅱ」「学びを創る」「国際協力入門」「地域防災入門」と各学部開講の授業で構成されています。

この「課題探求実践セミナー」の開設は2008年の共通教育改革にさかのぼります。初年次教育の充実・強化がカリキュラム改革の柱となり、初年次科目で自律型人材の基盤を育成する流れができました。その中心に据えられていたのが「課題探求実践セミナー」でした。「自律創造学習」(2004-2007年度)や「自律協働入門」(2006-2014年度)など大学教育のあり方を探るこれまでの実験的な取り組みの経験を活かして複数の科目群として新設されました。

「課題探求・解決」「他者との関係性」「自己決定」を自律型人材の育成のためのキーワードに位置づけた上で、学習者の能動性(学ぶ意欲)を引き出し、コミュニケーション能力や協働性、粘り強く考える力を育成することに有効とされていたPBL(Problem-based learning)をベースにしながら課題探求実践セミナーは創られています。学習・授業のなかで可能な限り他者との多様な関係を創出する工夫がされており(他者との関係性)、学生が自分で決めて自分の責任で進め



課題探求実践セミナーの進み方(基本型)

ていくような自己決定の機会を増やす（自己決定）という要素が組み込まれているところが従来の PBL との違いです。具体的には、グループ間交流（プレゼンテーションやディスカッション／ダイアログ）が多く取り入れられ、課題設定・解決のために授業以外の他者（学内の他の学生や教職員、地域住民など）との接触が促され、課題も学生が自由に設定できるように設計されています。

標準的には、1 授業あたりの学生数を 60 名までとして、1 グループの人数は 4-6 名で、複数教員（1 講義あたり 3 名程度）によるチームティーチング方式で担当し、授業に関して検討・改善を随時行っています。「学びの転換」を意図した授業であることから、高大連携科目として高校生を受け入れている科目もあります（2021 年度は「学びを創る」「国際協力入門」）。

特徴的な授業ということもあって教員の教育力向上（Faculty Development, FD）の実践的な場としてもオープンにされており、現場体験（On-the-Job Training, OJT）の形で担当外の教員も受け入れています。学生の自主性や意欲を引き出しながら授業を進めるファシリテーション力についても、大学教育創造センター主催で毎年プログラムが開講されており、担当者の受講が推奨されています。2009 年度からは四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD）事業により教職員の研修機会が大幅に増えました。2014・2021 年度には高知大学が主催校として SPOD フォーラムも実施されています。学生による「自己分析アンケート（2012 年度まで）」「Self-Assessment Sheet（2013-2016 年度）」「課題探求・課題解決力／協働実践力についてのアンケート（2017 年度から）」「授業改善アンケート」も全授業で実施・分析しており、共通教育活動報告書に毎年掲載されています。

最後に、私が担当している課題探求実践セミナーの学生コメントをいくつか掲載しておきます。



### 授業全体について

- ・自分を見つめ直すことができた。
- ・毎週やる気に満ち溢れていた。
- ・自分自身で考えると内容が頭によく残る。
- ・自分たちの話し合い次第で答えが変わってくる。
- ・他学部の学生と交流することができ友達を作るきっかけになった。
- ・自分の考えを表現・伝達する実践的な訓練ができる。
- ・答えのない問題に対してグループを作ってぶつかっていく所がとても良かった。
- ・少しずつ人前で話せるようになってきたと日々実感しています。
- ・今まで苦手だったことに挑戦できる機会になった。
- ・話をする 것도大切であることだと分かったが、話を聞く側の姿勢が大切だと感じた。
- ・授業を通して前より自分から話せるようになった。
- ・広く根本的な学びというものを提供してくださったなと感じた。
- ・自分から活動していかなければならないんだと実感できた。
- ・知識を得る学びとは違う、社会で生活するうえで必要なことを学べた。

### オンライン授業について

- ・対面授業ができない中、お互いの顔を見て話せる場があってよかった。
- ・リアルタイムのオンライン授業が一番授業を受けているという実感がわく。
- ・オンラインでは同時に全員の表情が見えるなどオンラインだけの良さがあった。
- ・全員の顔が見られるのが相手の反応もわかりやすくて良いなと思う。
- ・人との交流に飢えていたことに加え、授業を通して友人がかなりできた。
- ・授業でありながら、友達と話したり、授業後もブレイクアウトルームですずっと喋っていたり出来るのがありがたかった。

特集 分科会「大学基礎論」「課題探求実践セミナー」「学問基礎論」

# 学問基礎論

学問基礎論分科会長  
仲野 英司（理工学部）

## ●学問基礎論で学ぶこと

「学問基礎論」は初年次科目の一つで、2年次以降の各学部・各学科コースで学ぶ専門科目にむけての入門にあたります。内容は、概ね、キャリアデザインに関する講義、各学科コースの専門分野の紹介、専門科目の内容に関するグループワークとプレゼンテーション、アカデミック・ライティング技法など、今後専門科目を学生が主体的に学ぶための準備と実践的に有用な技法を学ぶ場になっています。授業方法、副題、到達目標などは、学部・学科コースまたは専門領域ごとに独自に細かく設定されていますので、詳細は今年度シラバスをご覧ください：KULAS のシラバスからシラバス検索の科目名検索において「学問基礎論」を入力し、所属学部開講の学問基礎論をご覧ください。

## ●学問基礎論分科会の活動内容

当分科会は、人文社会科学部、教育学部、理工学部、農林海洋科学部、地域協働学部、医学部からそれぞれ1名選出された計6名の委員で構成されています。本分科会では学生や教員によるアンケートなどを活用した授業改善のための活動、予算やカリキュラム編成を行っています。

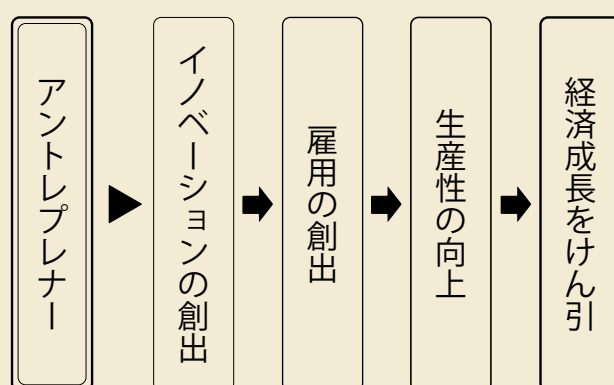


## 「アントレプレナーシップの育成」

高知大学地域協働学部 須藤 順

「アントレプレナーシップ(entrepreneurship、起業家精神)」と聞くと、多くの人は、「会社を立ち上げること」「新しい企業を立ち上げること」といったイメージを抱くと思います。アントレプレナーシップ研究は今のところ、固有の論理が存在せず、論者によって多様な理解のもとで議論が進められており、いまだ発展途上にある領域と言えます。

アントレプレナーシップはこれまで、機会やイノベーションとの関連で理解され、具体的には、アントレプレナーがイノベーションを生み出すことで雇用を生み出し、生産性を向上させ、経済成長をけん引するという認識がなされてきました。



しかしながらこうした理解は、アントレプレナーシップの一側面にすぎません。イノベーションの父と

呼ばれるジョセフ・シュンペーターは、イノベーションを「新結合を通じた創造的破壊」と説明し、その実行者をアントレプレナーと定義しました。新結合は言い換えれば、「異なる知の新しい組み合わせ」を指します。つまり、アントレプレナー≠起業家ではなく、新結合を通じて創造的破壊をけん引する人を指すことになり、起業はその手段の一つにすぎません。

これまでアントレプレナーシップ研究では、アントレプレナー特有の性格や心理特性、資質、遺伝的特徴を探る研究が数多く進められてきました。しかしながら、結果的にはアントレプレナーとそれ以外を分かち決定的な違いを見つけ出すことはできませんでした。

しかし、認知科学の発展に伴い、アントレプレナーシップ研究は大きな進展を見せつつあります。その代表的な議論が、サラス・サラスバシーによって示された「エフェクチュエーション」という意思決定ロジックの存在です。熟達したアントレプレナーが市場創造を進める際の意思決定に一定の共通したパターンが存在することが発見されたことで、アントレプレナーシップの育成が操作可能なものとして扱えるようになり、国内外問わず、注目を集め始めています。

こうした流れを受け、アントレプレナーシップの領域が拡張されて議論されるようになり、大企業、NGO/NPO、政府/自治体など、必ずしも起業を前提としない領域においてもその重要性が浸透してきています。

さて、国内に目を向けると、社会起業家やソーシャル・イノベーション研究の領域からアントレプレナーシップの最新の潮流とも符合する一つの方法が広がり

# 創造的破壊をけん引する人 新結合を通じて

を見せつつあります。それが、「マイプロジェクト（以後、マイプロ）」と呼ばれる方法です\*。マイプロは、2005年頃に慶応大学SFC・井上英之研究室（当時）から誕生し、今では、アントレプレナー育成だけでなく、企業内の人材育成、中高生に向けたキャリア教育（NPO法人カタリバによるマイプロジェクトアワード等）場面で活用されています。

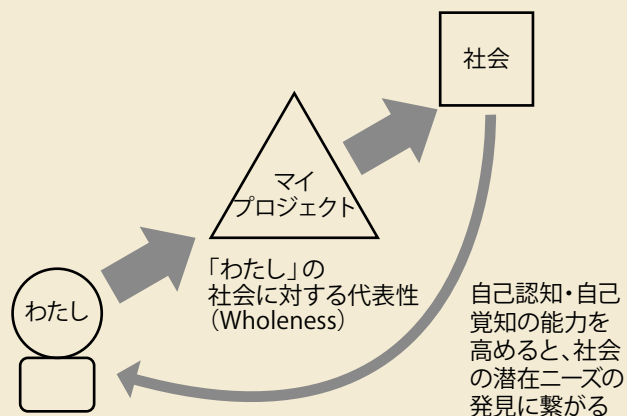
マイプロでは、自分のこれまでの人生を振り返る「me編」と、自分がやってみたいプロジェクトを書き出す「project編」の2枚のシートを使い、対話とアクションを進めながら、自分自身の経験の中から自分が本当に取り組みたいことや目指すべきビジョンを描き出して行きます。こ

こで重要なのは、プロジェクトを成功させることを重視しない点です。むしろ、心の中に引っかかっていたけれど見て見ぬふりをしてきたことに目を背けず、「本当のわたし」は何をしたいのか、どんな世界を創り出したいのかを声にし、仲間の協力を集めながら試行錯誤を重ね、訪れる困難に何度も立ち向かうしなやかなマインドセットの獲得が重視されています。

これからの時代においては、アントレプレナーシップは誰にでも求められる基礎的な素養の一つになっていくと考えられますが、最大の難しさは教室や座学だけでは身に付けにくいという点にあります。

“Find Your Passion”、“Learning by Doing”、“It Starts with You”。ぜひ4年間の大学生活を通じて、自分が情熱を傾けられることを見つけ、頭であれこれ考えこむのではなく、まず行動し、そこでの気づきに素直に向き合い、また行動を重ねながら徐々に自分の本当にやりたいことを見つけていってください。すべては皆さん一人ひとりが自分から動き出すこと、それが第一歩になります。

\*共通教育科目の社会起業論や高知県四万十町で取り組まれる「地域イノベーター養成講座」等で活用されています。





# 大学4年間に会わ「変化」 ～コロナ禍と授業・授業改善・そして「学び」～

共通教育実施委員会 FD 部会長

川本 真浩



一昨年そして昨年と、前任の高橋俊先生（現・共通教育主管）からFD部会長のお役目とともに「よい授業とは？」というタイトルも引き受けたことにして、小文を書きました。大学ウェブサイト (<http://www.kochi-u.ac.jp/gakubu/kyotsu-kyoiku/koho.html>) に公開されている『パイプライン』No.54とNo.56をよろしければご一読ください。私自身はそのつづきを書くつもりで、いささか慌てぎみ一学生でいえばレポート締切日の気分一で、パソコンの画面を見ながらキーボードをたたいています。

そうなのです。原稿を書くには「鉛筆やペンをとる」のではなく「キーボードをたたく」のです。皆様のご両親と同じ世代（または少し上）の私が大学生の頃、ちょうど個人向けワープロ専用機が普及し始めた時期で、1～2年生のときは手書きのレポートを出していたけど卒業の頃にはワープロも使って

いた、という大きな変化を実体験しています。ただ、振り返ってみると、手書きでないからといってレポートを書くのが格段に楽になったわけでもなく、2、3行しか映らない画面、インクリボン代がかさむので印刷は提出時のみ・・・文書の編集、字句の修正、清書（印刷）が省力化されたのはたしかですが、それがレポート内容つまり成果のレベルを高めることにつながったか？というと、よくわかりません。言い訳ですが、けっして「省力化で



余ったはずの時間」を無駄遣いしたわけでもなく、それは「次にやること」に振り向けられただけ、そして「次にやること」は連綿と続いてきたのです。「どこまで続くのでしょうか？」人生の終わりまで続きます。

さて、現在おこなわれている授業は、オンライン同期型・非同期型の講義や演習、あるいは対面実施の実習や実技系の授業など、さまざまな形をとっています。コロナ禍の前にもさまざまな授業、多様な学びの形がありましたが、感染防止策のために「多様性」の中身がずいぶん変わってしまいました。こうした変化、新しい多様性に対する学生の反応はさまざまです。講義なら「オンラインのほうが受けやすい」から「パソコンをじっとみているのは疲れる」「教室に来るほうがいい」まで、オンラインにしても「自分の好きなときに受講できる非同期型がいい」から「同期型のほうが生活リズムをつくりやすい」「非同期型だと未受講が溜まってたいへん」まで、いろいろな声があります。

そうした学生のさまざまな意見を受け止めながら、教員の試行錯誤と工夫は続いています。「どこまで続くのでしょうか？」教員を辞めるまで続きます。その試行錯誤と工夫こそが、私が務める任の名称についている「FD」です。学期末に似たようなアンケート依頼がいくつも来たり、あるいは担当教員から授業内容や実施方法についてのコメントを求められたり、といった機会があるでしょう。正直なところ面倒くさいと思うかもしれませんが、「どこまでも続く」授業改善のために、学生の皆さんには可能なかぎり協力してもらいたいと思います。

そして、このコロナ禍による大きな変化のなか、その変化ゆえに苦労している学生の皆さんも少なくないでしょう。そうした場合は、追い詰められる少し手前のところで、ぜひSOSを出してください。おげさなSOSでなくてもかまいません。教員や友人とのちょっとしたやりとり、あるいはそれとはなしに交わされる学生同士の語らいのなかで、「緊張緩和」のヒントが見つかるかもしれません。他方で、「楽ができそうだ」「むしろ楽だ～」という学生の皆さん（そんなに多くないでしょうが）は、その余力や余裕を「次にやること」に振り向けてください。国内外ではコロナのほかにもさまざまな問題が噴出しています。授業の実施方法や受講方法の変化に対応しつつ、そうした問題、自分の関心事を追究し、議論すること、それが長い人生の中で大学生として過ごす4年間にとりこんでほしいと思うことです。



## オンライン授業の課題と今後について

今年5月「第68回 中国・四国地区教育研究会(高知大学主催)」が開催されました。この研究会は毎年1回、中国・四国地方の大学教員間で大学教育について情報交換・共有することを目的に設けられているもので、今年はメインテーマを「オンラインによる教養教育」と掲げ、各大学がどのようにオンライン授業を展開してきたのか等について、発表・議論しました。

発表の中では、令和2年はコロナ対応のためにいきなりオンライン授業となったことで、学生だけでなく教員にとっても試行錯誤の年となったことに触れ、オンライン授業の課題が紹介されました。

### 【主な課題】

- ① 学習環境(学生の自宅のネット環境等)の整備
- ② 学生自身によるスケジュール管理能力が対面時より必要となること
- ③ 教員側から学生の反応や授業理解度が把握しづらいこと
- ④ 学生への課題負担が増加

オンライン授業は受講する時間や場所などの自由度が高い代わりに、自分である程度のスケジュールを組む必要があり、対面授業時よりも自身の管理能力が必要となります。

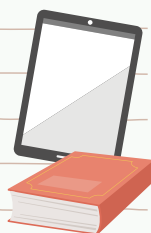
また、各授業が課題を出すことにより学生の負担が大きくなっている可能性があるため、課題の内容を「授業内容を理解しているか判断しやすい+学生の負担になりにくい簡易なもの」とするなどの方法で、大学の授業全体のバランスをとるべき、という意見もあり、これからオンライン授業を行っていく上で改善していくべき部分というのが、本研究会で少しずつ見えてきたように思います。



ちなみにですが、高知大学では「課題①」についてオンライン受講用教室を開放するという方法で対応しました。令和3年度第2学期は、共通教育1号館3階131～134番教室をオンライン受講用教室として開放しています。ぜひ、ご利用ください。

### 編集後記

最近思うのは、資料(文章)をスマホやタブレットで読むのと、昔ながらの紙媒体で読むのではインプットの質が違うのでは、ということです。準じて、オンライン講義も確かにメリットはありますが、やはり対面とインプットの質の面で違いはあろうかと感じています。そうしたテキストの違いを大切にしたいと思います。(S)



高知大学共通教育広報誌  [ハイライン]  
PipeLine No.58

発行 / 高知大学共通教育実施委員会  
編集 / 共通教育実施委員会広報部会  
〒780-8520 高知市曙町2丁目5-1  
☎088-844-8168(学務課全学・共通教育係)

発行日 / 2021年11月  
制作 / ㈱西村謄写堂

広報・記事についてのご意見をお待ちしています。  
Mail : [gm06@kochi-u.ac.jp](mailto:gm06@kochi-u.ac.jp)